

第12回委員会説明資料
第11回委員会での
指摘事項と対応方針

令和5年10月12日

国土交通省中部地方整備局
三峰川総合開発工事事務所

No	分類	指摘事項	委員会時の対応	対応方針
1	ストックヤードの運用	次回の運用時には流入土砂量、放流土砂量、貯水池の堆砂量、ストックヤードの放流土砂量、ダム諸量を整理して示してほしい。	→意見を踏まえた形で整理する。	測量結果等を踏まえて整理する。 ⇒第13回委員会で報告予定
2	DO低下	資料p.19について、ストックヤード投入土砂はやや還元が進んでいるように見えるが、重大な影響が出るかどうかポイント。令和3年は安全側となる洪水ピーク後の流量の多いときにストックヤードを運用したが、ピーク前の流量の少ないときにストックヤードを運用する場合を想定し、DOが低下するという仮説がどれくらい正しいか丁寧にデータをとって確認した方がいい。高遠ダム下流では曝気されて分からなくなるため、その上流で検証すればよい。	→バイパス吐口等でDO観測を実施し、DOの低下を確認する。	ストックヤード内土砂の酸化還元電位、二価鉄および分派堰、バイパス吐口等でのSS、DOを計測し、DOの低下の仮説を検証する。 ⇒資料3-P.4 資料4-P.28

No	分類	指摘事項	委員会時の対応	対応方針
3	付着藻類の無機物率と濁度	付着藻類について、無機物率が高い要因が平常時の濁度によるものか、出水時の影響なのかが気になる。 付着藻類が一回無機物を取り込むと無機物が離脱することはなく、また濁度が高い水が流れてくると付着藻類が生長しながら無機物を取り込んでいくメカニズムがあるため、その関連で無機物率が高い理由を精査するとよい。	—	イベントと無機物量・無機率等の変化を詳細に見ていく。 ⇒現在令和5年度のデータを追加して分析中、第13回委員会で報告予定
4		縦断的に欲しい地点の濁度がピンポイントであるとよい。	→三峰川橋には過去に濁度計を設置していたが、洪水後の流路変動による干出などがあり、現在では計測を実施していない。再設置を検討する。	三峰川橋に濁度計を再設置した。 ⇒出水で埋没・修理 ⇒修理後、竜東橋に移設
5		分析の方法としては、横軸にクロロフィルaとフェオフィチンの合計、縦軸は無機物量でプロットすると、正の相関関係があると言われている。この傾きは、出水の有無にかかわらず、平常時の濁度に支配される傾向がある。パルス的に濁度が上がるようなインパクトがあったときにその正の直線からプロットがずれるかどうかを見るとよい。詳細は個別に相談して欲しい。	→意見を踏まえ、相談させて頂く。	萱場委員と相談の上、既往のデータベースから左記のグラフを作成し、地点別、イベントからの経過時間別等、クロロフィルa量区分別に分析する。 ⇒現在令和5年度のデータを追加して分析中、第13回委員会で報告予定

No	分類	指摘事項	委員会時の対応	対応方針
6	底質	p.19について、貯水池に堆砂して年月が経った土砂はその時点で還元が進んでいるため、順調に浚渫が進んで深い層から浚渫する場合は注意が必要。ここに示されているチェックをしていけばよい。	令和4年度投入土砂は分派堰に近い上流部のものであるため、比較的新しいと考えられる。また、令和3年度投入土砂は表層の広い範囲から吸引したものであるため比較的新しいと考えられる。	原則的に表層から浚渫するので、問題ないが、投入後3年残置させた場合は、投入土砂の酸化還元電位、二価鉄を計測していく。 ⇒資料3-P.4 資料4-P.28
7	インパクト	上流側の境界条件を整理しておかないと下流で起こっていることが理解できないため、平成30年以降の試験運用の実施状況や高遠ダムフリーフローといったイベントを時系列で整理して、議論を進めていくとよい。	→意見を踏まえた形で整理する。	イベント(インパクト)の時系列表を作成する。 ⇒資料4-P.9
8	高遠ダムフリーフローの影響	現地視察での印象では、高遠ダムのフリーフローの影響で生物が大きく減少しているように感じた。夏季までに生物相が回復しているのだろうか。	→令和4年度は高遠ダムのフリーフロー期間が例年よりも長く、影響がより大きい可能性がある。融雪出水などで流量が増えると状況も変わっていくと考えられるため、令和5年度の出水期前に調査を行い、回復状況を把握する。	底生動物の1月調査結果、出水期前調査結果を整理し、高遠ダムフリーフローの影響を評価する。 ⇒資料4-P.35,36

No	分類	指摘事項	委員会時の対応	対応方針
9	陸域植生	陸域植生について、裸地の面積が増加している一方で、礫河原性のカワラヨモギ-カワラハハコ群落の面積が減少していることが気になる。裸地が礫であるか泥であるかに注意するとともに、重要種が分布していないか環境情報図等も再度確認し、陸域環境での影響をもう一度考えていくとよい。	→定期調査などで状況を把握する。保護が必要な貴重種などの確認はされていない。	河川環境基図調査におけるカワラヨモギ等群落の面積の変遷、遷移を確認する。またUAV写真等から自然裸地の質が確認できるかを検証する。また陸域の重要種を確認するとともに陸域でのインパクトレスポンスを再考する。 →分析中、第13回委員会で報告予定
10	河床変動	参考資料に経年的な横断測量結果を掲載しているが、どの区間が洗堀されているか分かるので最深や平均河床高縦断図の変動も示してほしい。	→意見を踏まえた形で整理する。	河床高縦断図の変動を整理して示す。 参考資料-P.7
11	施設モニタリング計画	土圧計はどこで値を確認しているのか？運用前に異常がないか確認しておくこと。	→美和ダム管理支所でオンラインデータが確認できる。運用前の土圧計の値を確認しておく。	洪水期前に土圧計の値を確認した。 資料3-P.5
12	陸域植生モニタリング計画	植生分布調査は実施しないのか？踏査レベルでも良いので令和4年に河原性植物が回復過程にあるのか見た方がいい。	→R5での植生分布調査は予定していないが、UAV撮影写真などを活用して状況把握を行う。	UAV写真を確認し、対応を考える →分析中、第13回委員会で報告予定
13	運用体制	令和3年度の試験運用結果から、現状としては大きな問題となる影響はないと思われるが、次年度の試験運用は洪水の立ち上がり時に運用し、データを確実にとれる体制で臨んでほしい。	→操作のタイミングを逃さないようにしたい。	出水時の招集体制を確認して、出勤に備える。

No	分類	指摘事項	対応方針
1	付着藻類	令和元年度の平常時において、無機物量が多くなっている場合があるが、同時期・同地点内でもデータのバラツキが大きい。サンプリング状況を確認しておくこと	⇒整理中、第13回委員会で報告予定
2		令和4年度の三峰川と天竜川のクロロフィルa量～無機物量関係が同様の傾きになっていることと三峰川の無機物量が多いデータがとれていないのは違和感あり。サンプリング状況の確認並びに理由を整理すること	⇒整理中、第13回委員会で報告予定
3	陸域植生	平成18年度以降の基図調査の結果から、各群落面積の経年変化を整理すること。また、消失・減少した群落がどこに位置しているかを整理すること。出水によって水際の植生が特に減少している可能性がある。	平成18年と23年の基図調査結果を追加する ⇒整理中、第13回委員会で報告予定